

「海の体験活動に期待すること」

東京海洋大学学術研究院 海洋政策文化学部門
教授 千足 耕一 氏

「理論物理学者として著名なアルバート・アインシュタインは、“体験はなぜ大切か”ということに関して、「何かを学ぶためには、自分で体験する以上にいい方法はない」という名言を残しています。ここでいう体験とは、疑似体験や間接的な体験ではなく、直接的な体験を述べているのだろうと想像できます。

海の体験活動にこだわりを持ち、子供たちに「本物の自然に触れる直接体験」を与えてきた先駆者に、ジャック・T・モイヤー博士がいます。モイヤー氏はその著書『子どもは海で元気になる』のなかで、「海は大きすぎて破壊されることはない」という考え方を捨て去ることを強調し、「私たち人間は、健康な海が存在なしに生きることはできません。だからこそ、海について学ぶ機会を設けることは、21世紀の最重要課題と言えるのです」と述べています。そのような考えを基に「何よりも自然環境に目を向けることを重視し、生徒個々人が直接フィールドに出て、自ら発見することを基本とする」海の教育プログラムを三宅島サマースクールで実践しました。同時に、その著書の中で、このような体験は出来るだけ早い時期に行われることが大切であるとも述べています。

海は極めて身近な大自然です。海は、人知が及ばないところ、天地自然と対峙できる場所であると海洋冒険家の白石康次郎氏も述べています。自然と関わる中でこそ、自然に対する本当の感性を養うことも可能になるのではないかと考えられます。

海には様々な生物が棲んでおり、我々はそれを食料として利用しているといった現実があります。捕獲する、調理する、食べる、などの一連の体験をすることから、生きている実感を得ることも出来ます。海は貴重なタンパク源を含んだ生き物たちが生息する場所でもあるということについて体験を通して学ぶことは、海を大切にしようといった認識を得るために最良の方法であると確信します。

近年では、少子化に拍車がかかり、子供たちも学習塾や習い事などで忙しく、例えば海洋少年団の団員数が減少するなどの現状も報告されています。また、親や教師たちの安全面に関する心配などから、海での遠泳行事が減少してきているといった報告があります。その一方で、国立青少年教育振興機構のなかでは、幼少時からの海での体験活動の実施について推進しようという動きもみられます。指導者が安全面に関して十分にトレーニングを積み、幼少期から本物の海に触れることのできるプログラムが開発され、子供たちが海を大切にする時代が来ることを期待します。